

追悼

名誉会員 棚井敏雅先生を悼む

植村和彦



本会元会長で名誉会員の棚井敏雅先生は、平成18年2月25日、膵臓疾患のため亡くされました。享年82歳でした。先生はいうまでもなく、日本の新生代古植物学の第一人者で、先生の歩まれた道は新生代古植物学の発展期の歴史でもあります。ここに先生のご足跡とご遺徳を偲び、謹んでご冥福をお祈りいたします。

先生は大正12年8月19日愛知県のお生まれで、第一高等学校から東京帝国大学理学部地質学科に入学、昭和21年に同学科を卒業され、同大学の副手から助手になりました。在学中から大塚彌之助教授のもとで新生界層位学を専攻され、とくに終戦直後の困難な時代に燃料資源開発のため、東北地方や北海道の炭田や油田の調査に従事されました。当時の大塚教授のもとには、古生物学はもとより、新生界層位学、テクトニクス、ネオテクトニクス、自然地理学などの多彩な分野で有能な人材が参集していました。棚井先生はこの大塚門下生の中で重要な一翼を担っていました。昭和26年には通産省工業技術庁地質調査所に赴任され、石炭地質学を中心とした調査研究を続けられました。山形県西田川炭田の調査では、火成活動を層位学の観点から捉えた、火山岩層序の先駆的研究も行っていますが、なんとといっても、石炭層に伴って多量に産出する植物化石に関心をもちたのは、ごく自然の成行きでありました。先生の古植物研究は独学に近い形で出発されましたが、折につけ植物学の前川文夫教授（東京大学）

の薫陶も受けられました。

昭和31年、先生は北海道大学理学部地質学鉱物学教室の助教授として赴任され、佐々保雄教授、佐藤誠司助手とともに燃料地質講座を担当されました。その後、昭和47年には教授となり、昭和62年3月に定年退官されるまで、30余年にわたって燃料地質学と古植物学の教育と研究に従事され、多数の優秀な地質学者・地質技術者を育てあげられました。北海道大学を退官された後の平成元年から2年間、先生は国立科学博物館の客員研究員を勤められました。私にとっては忘れられない2年間で、古植物学（古生物学）の将来と自然史博物館の果たすべき役割について、大所高所からのご見解を賜りました。また、北海道の石狩層群を中心とした古第三紀植物の研究と資料整備にご尽力いただきました。

先生の古植物研究は北海道大学に赴任されてから加速されました。昭和36年にはそれまでの研究成果を学位論文（東京大学）「本邦の新第三紀植物群の変遷（英文）」にまとめられ、北海道大学紀要第4類に上梓されました。この大部のモノグラフは、陸成層の生層位学的位置づけを海成層の時代論を吟味しながら体系づけ、新第三紀植物群を6つの植物群型に区分して、その変遷を明らかにしたものです。先生の学位論文の仕事と前後して、日本の古植物研究には大きな転機がありました。

棚井先生が新生代植物について本格的に取り組まれた頃、メタセコイア属を提唱した三木茂教授と、メタセコイア現生種の発見とともにいち早く中国の自生地に調査隊を派遣したカリフォルニア大学の古植物学者R. W. Chaney教授は世界的に名が知られていました。Chaney教授がNSF（全米科学財団）による「日本の第三紀フローラ」の研究プロジェクトを三木教授に打診してきたのが昭和33年のことで、翌年から昭和46年にChaney教授が急逝するまでの長期にわたってこのプロジェクトは続けられました。棚井先生は日本側メンバーの最若手でした。当時の社会情勢では科学研究費などは桁違いの研究費が支給されたそうですが、研究費と成果報告書に対する考え方の違いや、Chaney教授の強烈な個性と折合いがつかないといった人間関係の問題があって、このプロジェクトの成否が危ぶまれたこともあったようです。この困難な状況を棚井先生は幹事として奔走し、1963年には「日本の第三紀植物群—中新世植物群」を地質調査所80周年記念出版物として、1972年には「日本の第三紀植物群、第2巻」の出版に漕ぎつけたのです。この2冊の英文論文集は、日本の第三紀植物群の研究を世界に紹介し、高い評価を受けた金字塔であります。

棚井先生の研究は、日本の第三紀植物群の変遷を古植物学的に明らかにし、さらに、日本を含む現在の東アジア温帯林の植物相（フローラ）と植生の成立を明らかにしたいという、一貫した姿勢がありました。北半球の温帯林成立については、いわゆる北極地起源説（周北極地第三紀ジオ

フローラ)が有名ですが、化石記録にも理論的にも多くの矛盾点が指摘されていました。先生はそれを検証するために、分類群毎に緻密な分類学的検討と系統関係の考証を行い、その上で系統群毎の分布変遷を明らかにすることが必要だと説きました。緻密な分類学的検討には、現生葉を透明化・染色した葉脈標本を整備し、微細脈の比較形態から、化石葉を検討する手法を取り入れています。系統関係の考証には苦勞されましたが、分岐分類や系統解析の手法が確立する以前から化石、現生種を含め、できるだけ多くの形質を取り上げる重要性を指摘されていました。化石および現生カエデ属の一連の研究は先生の代表的な業績であります。また、同様の観点からナンキョクブナ属やブナ属などを取り上げた研究を数多く発表されました。

遺伝子情報に基づいた分子系統に立脚し、形質進化や植物地理が盛んに論じられるようになった今、質の高い化石記録の重要性が再認識されるようになってきました。棚井先生の研究姿勢は、考証のもとになった化石を記載して提示し、さらに証拠標本を登録・保管して、将来の研究に資するという点で一貫していました。標本を整理してコレクションとして保管することは、古生物学や自然史科学では必要かつ当然のことですが、それを完璧に実行することは口で言うほどたやすくはありません。先生は生来の几帳面な性格からそれを自ら行い、また燃料地質講座の渡辺敏子氏とともに実行されました。

先生は、エルセビア社の国際学術誌 *Review of Palaeobotany and Palynology* の編集委員を、同誌創刊直後の1968年から29年間の長きにわたって勤められました。編集委員あるいは査読者として、事の本質をつき、懇切丁寧な、あるときには辛辣なコメントを付けるのが先生の得意とされた一面であります。同様に、論文別刷をお送りした際、書状による丁寧な論評を下さり、大いに励まされた国内外の研究者は多いと思います。先生はまた、国際古植物学機構 (International Organization of Paleobotany) の日本代表 (1979-1986) を勤められました。6年に一度開かれる国際植物学会議では、第11回 (シアトル, 1969), 第13回 (アデレード, 1981), 第14回 (ベルリン, 1987) に招待講演をされ、インドの Birbal Sahni 古植物学研究所の国際会議など多数の国際集會に招聘されて講演をされています。

北海道大学における先生の学生への指導は厳格でした。公私にわたる厳しい指導はときに深夜に及ぶことも少なからずあったようです。それは研究に対して妥協を許さぬ先生の姿勢で、教育的配慮をもってなされたものであります。先生の厳しさは学生への思いやりの裏返しでもあり、それをありがたかったと述懐する卒業生は多いと思われます。

先生はお酒はそれ程強くありませんでしたが、盃を酌み交わしながらの談論風発を好まれました。煙草は好まれたので、酒の席は煙幕状態となり、議論が深更に及ぶことも珍しくはありませんでした。先生の誘い水 (挑発) につられ、持論を披露したのは良いが順次論破されたこ

と数知れません。先生は亥年生まれで自らを“猪突猛進”だと嬉しそうに話されたことがあります。私も二巡り違いの亥年で、若輩ではありますがそれには負けないと応じさせていただきました。示唆に富む議論やご指導を賜ったことは何物にも換えがたいものと感謝しています。

先生とアメリカの Jack A. Wolfe 教授 (合衆国地質調査所、後にアリゾナ大学) は永年にわたる親交があり、アラスカのケナイ半島の中新世植物群や北米のカエデ属化石のモノグラフなどの共著があります。その Wolfe 教授は昨年8月、カリフォルニア山中で化石採集中に崖から転落し、不慮の死を遂げられました。その悲報を先生にご報告したところ、ひどく落胆されました。おりしも、Wolfe 教授と D. L. Dilcher 教授 (フロリダ大学) の70歳をお祝いする国際シンポジウムが企画されていた最中だったので、両教授はくしくも生年月日まで同じで、アメリカを代表する新生代古植物学者です。このシンポジウムは本年3月にフロリダ大学で開催されました。その前の2月頃より先生は体調を崩されていましたが、この集會は最後まで気にされていたようです。2月22日に先生のお嬢様からのメールで、「集會には出席できず残念だが、関係者によしなお伝えください」というのが、先生から頂いた最後のお言葉になってしまいました。フロリダの集會 (Advances in Paleobotany, recognizing the contributions of David L. Dilcher and Jack A. Wolfe on the occasion of their 70th year) には西田治文教授 (中央大学) と私が出席し、Wolfe 教授の追悼の席上、棚井先生のご逝去を報告しなければならなかったのが痛恨の極みでありました。先生と Wolfe 教授の親交は諸外国の研究者にも旧知のことだったので、先生のご逝去を惜しむ多くの言葉が寄せられました。

棚井先生は昭和54年に新生代古植物の研究で本会学術賞 (学術奨励金) を受賞されました。また、本会の評議員 (昭和48年~平成元年)、会長 (昭和60年~62年) を歴任され、学会の運営や古生物学の発展に尽力されました。同様に、日本地質学会、日本鉱山地質学会、日本植生史学会で地質学、古生物学の発展に尽力されています。このほか、文部省学術審議会専門委員、日本学術会議古生物学研究連絡委員、通産省の石炭鉱業審議会専門委員、鉱業審議会専門委員、石油審議会委員、夕張新炭磁事故調査委員会委員、さらに北海道、新エネルギー開発機構、北海道開発庁の委員など、学術の発展と石炭鉱業・石油鉱業の振興に大きく貢献されています。平成12年にはこれらの功績により勲三等旭日中授章を授与されました。

最後に、先生が関与された植物化石標本、参照現生植物標本の葉脈標本、腊葉標本、果実・種子標本は、古植物学論文蔵書とともに国立科学博物館古植物標本のもとに一括して整理・保管されています。先生が意図され、時間をかけて整理されたこれら諸資料が今後活用されることが、先生のご遺志に対する何よりの餞と信じているところです。